ＬＡＲＡの運営にみるボランタリー組織の使命

－多々良紀夫の研究成果と課題－

○　常磐大学　　西田　恵子（会員番号 1970）

キーワード：戦後混乱期　救援物資　LARA

１．研 究 目 的

第 2 次世界大戦後、日本への支援として送られたララ救援物資の意義について社会福祉の領域で明らかにすることが研究全体の目的である。

ララ救援物資は、第 2 次世界大戦後、戦災国である日本にアメリカの民間団体 Licensed Agencies for Relief in Asia（アジア救援公認団体、通称 LARA、以下「LARA」という。）が送った物資である。既存の様々な社会システムが崩壊した戦後混乱期、戦中戦前からの要援護者は一層厳しい状況に置かれ、さらに戦災によって生存、生活に困難を来した者達が膨大な数ともなり、救済を要する層は飛躍的に増大していた。しかし社会福祉の諸制度は未整備であり、公的な保障もいきわたらない状況が続いていた。そこへの海外からの救援であった。救援物資の量は、救援物資が積まれた第一船が日本へ着いた 1946 年 11 月から 1952 年 6 月の終了まで、計 458 船、食糧・衣服・医薬品・靴・石鹸・布地・綿など総量約 3,300 万ポンド（約 15,000 トン）、当時の金額にして 1,100 万ドル（邦貨で 400 億円）に相当する規模になる。また、その配分先は児童施設、老人収容施設、結核・癩施療施設（当時の名称を用いる）をはじめ、ミルク・ステーション、戦災者引揚寮、病院など施設が多くを占め、配分対象となった施設の数は約 5,500 にのぼった。ＧＨＱ、日本政府が関わって進められた大規模なこの救援活動だが、社会福祉領域での研究は多くない。『月刊社会事業』や『月刊福祉』がララ物資について記事にしたことは幾度かあるが、ララ救援物資の配分終了を機として 1952 年に厚生省がまとめた『ララ記念誌』が長く唯一の文献であった。そこに加わったのが多々良紀夫が 1999 年に著した『救援物資は太平洋をこえて 戦後日本とララの活動』である。

本発表は研究全体の一部をなすもので、ララ救援物資及び LARA の先行研究者である多々良の研究成果をたどり、そこに残る研究課題を抽出するものである。

２．研究の視点および方法

厚生省の『ララ記念誌』は、厚生省が加藤恭亮に編纂を依頼し、約 6 年に渡る救援物資の概況を詳細にまとめたものである。その内容は配分を受けた日本国内でどのような運営が行われたかについての記述が多くを占める。それに対して多々良が著した『救援物資は太平洋をこえて 戦後日本とララの活動』は、救援物資を送る側の活動、運営がどのようなものであったかを審らかにしようというものであった。47 年という時間を挟んで両者がどのような対照関係にあるかを整理しておくことは、今後の研究に有用だと考え、その検討を行う。2012 年 4 月に急逝した多々良に同年 2 月に行ったインタビューの内容についても吟味し、彼がこの研究を通して明らかにした事柄の意義を考察し、今後のララ救援物資及び LARA の研究の一助にする。

３．倫理的配慮

文献、資料の引用にあたっては出典を明らかにし原典主義を貫いている。また、研究の過程で証言を得る際には、協力者の名誉やプライバシー等の人権を侵害することがないよう十分な

配慮を行うとともに、把握の内容については本人による確認と承諾を行っている。

４．研 究 結 果

多々良が『救援物資は太平洋をこえて 戦後日本とララの活動』を著した背景には、ララ物資が送り届けられて 50 年となる 1996 年に、全国社会福祉協議会（以下、「全社協」という。）が組織記念事業としてララ関係者をアメリカ、カナダから招く感謝会があった。全社協は日本で設置されたララ中央委員会に職員が委員として入るなどの関わりをもった組織である。全社協は感謝会の企画に際して、多々良に「ララに関する歴史資料の収集」を委託したのである。

多々良は高齢者福祉研究に多くの力を注いだ人物だが、1975 年に米国ブリン・マー大学に提出した博士論文は「1400 Years of Japanese Social Work from Its Origins through the Allied Occupation,552-1952」であり、日本における社会福祉政策の展開に大きな関心を持ち、実際、占領下の社会福祉政策の分析を行っている。その知見と研究ネットワークがララ物資の研究に活かされたといえる。彼の資料集先は、連邦議会図書館、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、カトリック大学、カトリック戦時救済奉仕団、クリスチャン・サイエンス奉仕委員会、兄弟奉仕会、ルーテル教会世界救援団、米国 YMCA などであったが、本研究に有用だった資料の多くはフィラデルフィアの米国フレンド奉仕団歴史資料保管所で入手したものだったという。

ララ救援物資の提供組織 LARA は、「ララの始まり…（中略）…多くの外人に尋ねたところだが、皆云い合いしたように『いつどうして始まったか、どうもハッキリしません』と明答をしぶる。しぶるのではなくて、出来ないらしい。それ位ララの発端はハッキリしていないのである」（厚生省：1952：19 頁）とされてきた。それを LARA の本体に ACVAFS という組織があり、一連の経過と調整の中から LARA が発足したという事実をもって多々良は修正した。その他にも多々良が LARA の設立経過と運営について明らかにしたことは少なくない。

その一方、彼が収集した資料と著作とを照らしていくと、沖縄における LARA の活動のように、資料を入手しながら研究成果として世に示すには至らなかったこともある。

5. 考 察

多々良は ACVAFS の存在、ララ代表のローズの動向等、これまで日本では十分に把握されてこなかったことなどを、短期間でありながらも精力的な資料収集によって明らかにした。LARA の設立経過を辿れるのは彼の大きな業績である。また、LARA の設立経過を吟味すると複数の組織が関わっており、その組織間の調整の内容に組織のアイデンティティをうかがうことができる。さらに救援活動がアイデンティティに裏づけられた使命から展開されたものとして理解することもできる。このことはボランタリー組織の自立性に関わるものだと考察できよう。このような成果の一方、奇しくも彼が明らかにした LARA を構成する 14 団体のうちの 1 団体の資料に多くを負ったという状況から、LARA の全容を明らかにするには至れなかったことも明らかとなった。日本の戦後混乱期にララ救援物資及び LARA がもった意義を考察するにあたっては、引き続き、資料の掘り起こしと分析が求められるといえる。

〔参考文献〕厚生省『ララ記念誌』1952 年、多々良紀夫著『救援物資は太平洋をこえて 戦後日本とララの活動』保健福祉広報協会 1999 年、Toshio Tatara 著・古川孝順・菅沼孝訳『占領期の福祉改革　福祉行政の再編成と福祉専門職の誕生』筒井書房 1997 年、右田紀久恵・高澤武司・古川孝順編『社会福祉の歴史　政策と運動の展開〔新版〕』有斐閣 2004 年

※本研究は科学研究費の助成を受けたものである（研究課題番号 26285133）。